

第2回四国ブロッククラブミーティング 2009（1日目）

日時:2009年11月21日土曜日 13時～17時

会場:香川県「香川大学教育学部」

はじめに…

去る11月21日(土)に香川県の香川大学教育学部にて四国ブロックの第2回クラブミーティングが開催された。

創設支援クラブ・活動支援クラブ・県総合型クラブ連絡協議会に加入するクラブ代表者をはじめ、総勢45名が今回のクラブミーティングに参加した。

今回のクラブミーティングの目的は、「クラブづくりを検証する:確かな成果と成し遂げるべき課題」という点にあった。それは、これまでの活動を振り返り、設立当初の目的と照らし合わせた上で、各クラブの歩みを評価してもらい、クラブの確かな成果と今後、成し遂げるべき課題について考える機会を設けたいと考えたからである。

基調講演:「クラブづくりを検証する:確かな成果と成し遂げるべき課題」

まず、齋藤地方企画班員によって、メインテーマに関する基調講演が行われた。

教鞭に立つ傍ら齋藤班員は、農業も営んでいるが、まず参加クラブに対して、「突然ですが、あなたのクラブはどっち?」というスライドを提示し、現在、創設中のクラブが「温室型」なのか、「露地型」なのかを質問した。かなり多くのクラブが「露地型」のクラブとして挙手したが、齋藤班員は、結論的には、どちらのタイプでも構わないものの、誰が声を上げ、このクラブの育成に乗りだしたかということよりも、このクラブが誰のために、何のために存在するのか?そしてこのクラブで何を成し遂げようとするのか?クラブにかかわる人たちが、その主体性を意識しているかどうかを重要であると主張した。



2000年に策定されたスポーツ振興基本計画に「総合型地域スポーツクラブ」の存在が位置づけられ、多様・多世代だけでなく、これまでの地域スポーツクラブとは大きく異なり、地域内の様々な関係団体との連携を図り、地域住民の声を吸い上げ、総合型クラブがスポーツと文化を享受するための健康的な生活文化拠点となり、生涯学習社会の実現に寄与するということがクラブに期待された。その意味において、齋藤班員は、まず、クラブの存在価値、存在意義を検証すべきだと主張した。

今回、クラブの参加者に事前に提出してもらった資料において、「目的・ミッション」「組織づくり」「会員獲得・集客」「運営・自主財源の獲得」といった4つの視点から現在までのクラブの歩みを検証してもらったが、クラブ創設に対する取り組みが単なる自己満足に終わることなく、「地域社会への貢献」という大きな命題に向かって歩みを進めているのか、つまり、地域社会が必要とするクラブになれるかどうかを絶えず念頭に置き、活動に取り組む必要があることを主張した。

さらに齋藤班員は、現在のクラブの検証だけでなく、クラブの将来の検証として、「会員によるクラブ評価(自己点検、自己評価を常に行うことが発展につながる)」「他クラブとの相互評価(お互いのクラブが評価し合うことも大切になる)」「第三者評価(総合型クラブ基準協会のような組織が必要となってくる)」といった3つの視点が求められると述べた。

それは、地域社会にとって総合型クラブが必要とされるための検証であり、努力であり、またクラブが地域社会をリードする存在となり、ひいてはクラブの取り組みが平和社会の実現につながることを切に願うと述べて、話を締めくくった。

グループディスカッション

クラブの参加者に対しては、「クラブづくりを検証する」というテーマに沿って、事前資料の提出を求めた。視点は、齋藤班員の基調講演にも上げられた「目的・ミッション(理念・使命)」「組織づくり」「会員獲得(集客)」の3つで、それぞれ5つのチェック項目に対して、「1. 不十分である」から「4. 十分できている」の4段階尺度で自己評価してもらった。

例えば、「目的・ミッション」であれば、「様々な事業や活動は、クラブの目的・ミッションを達成するために、必要な活動となっているか?」といった内容について事前にクラブの取り組みを評価してもらった。そして5つのチェック項目を踏まえ、成果を上げることができた要因とうまくいかなかった原因・今後の課題について事前資料に記述してもらった。

各クラブが提出したその資料に基づき、各クラブが3つのテーマの中から特に話し合いたいものを事前に申し出てもらい、3~4人程度の少人数のグループを編成して、ディスカッションを行った。

「会員確保(集客)」のグループに参加していた中山間地域のクラブ担当者は、クラブの運営委員を確保するために、農作業をしている高齢者に声を掛け、世間話をするところから初めて、信頼関係を築き、担当者に対して興味を持って抱いてもらってからスポーツクラブの話をするなど、ある種の営業活動のようなことを個人的に行うという体験談などが語られた。

また他のクラブ担当者からは、会員確保といってもがむしゃらに集めるといよりは、クラブの趣旨や活動にマッチしそうな人たちにターゲットを絞り、地道に事業展開するといった意見が述べられたり、会員を確保する場合にも身の丈にあったクラブ運営を行うために、組織の力量を知り、地域にアプローチしたりすることが重要であるといった意見が述べられた。

その他にも、子どもとともに活動することを望む高齢者やスポーツをしたことがない人を巻き込む工夫、既存団体との棲み分け、親子や母子家庭などの心をどのようにつかめばいいのかといった事例などが紹介された。

ディスカッションの中でも興味深かった内容として、地域の経済的環境、地理的環境などを考慮したクラブ運営の必要性や、また地域住民や集団に対する偏見を持たないこと、さらには、クラブづくりとは人づくりであり、人を育てない限り、組織(クラブ)の発展はないといった会員確保の話題から組織づくりへとディスカッションが幅広く繰り広げられた点である。

民間人の発想に限界はなく、我々自身、総合型クラブに対する固定的な観念を抱くことなく、クラブの持つ可能性に焦点を当て、様々なキャリアを持つ民間人のアイデアや発想をどのようにクラブマネジメントに活かすかを考える必要があると感じた。



おわりに…

「クラブづくりを検証する」というテーマを掲げた今回のクラブミーティングでは、冒頭の基調講演で齋藤班員が述べたように、誰のための、何のための、そして何を成し遂げるためのクラブであるのか、といった視点をクラブは絶えず問い続けなければならないというメッセージを送りたいという地方企画班員ならびにクラブ育成アドバイザーの願いが込められていた。

それは、限られた時間でクラブを創設しようとする各々の組織が、本当に意味ある事業、意味ある活動に手掛けてきたのかを振り返ってもらいたかったからに他ならない。そのためにも検証とそれにとまらぬ評価は、クラブの成長には欠かせないものである。しかしながら、我々日本人は、「評価」という言葉に対しては、ポ

ジティブなイメージよりもネガティブなイメージを抱きがちで、評価から連想される言葉は、「揚げ足を取る」「ダメ出しをする」といったことが想像されることだろう。特に、多くのクラブに携わる運営委員や指導者は、ボランティアベースで活動を行っているため、そのような評価を受けることは、「タダでやっているのに、何でそこまで…」といった自尊心を傷つけるものと捉えがちである。しかしながら評価は、前述のような指摘をするものでもクラブやクラブにかかわる個人の存在をさげすむものでもない。評価は、活動に携わる人がより輝く存在となるために行うものであるという価値の変革が必要である。我々人間の成長は、試行錯誤、トライ・アンド・エラーを繰り返し、過去の失敗や取り組みを振り返り、次のアクションにつなげるためのフィードバックによって成し遂げられてきたといっても過言ではない。同時に、「タダでやっているのに…」という考え方や発想は、「タダならば、無責任でもいいのか？」という地域における活動やボランティアの存在価値を揺るがしかねない。「やることが美德」ではなく、より望ましい取り組み、いやより楽しく、より輝いた活動を、個人とクラブ組織が行うために、各クラブが評価に対する価値観を変え、クラブづくりの検証に取り組んでもらいたい。

2年目のクラブは、残された期間で当初に抱いた想いをカタチにし、クラブを創設することだろう。また1年目のクラブは、この1年間の活動を振り返り、残された1年間をどのように過ごすべきかということを感じ取ってくれたことに違いない。これまでずっと言い続けてきたように、「四国は一つ！」という想いを、このクラブミーティング、そして各県と四国ブロックの連絡協議会を通じ、実現できればと切に願っている。

(文責:地方企画班長 長積 仁)

第2回四国ブロッククラブミーティング2009（2日目）

日時:2009年11月22日日曜日 10時～17時30分
会場:香川県「香川大学教育学部」

はじめに

平成21年5月に、香川県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会が発足しました。その最初の大仕事として、四国ブロッククラブミーティング2009の2日目を主管させていただきました。

「つながれ！広がれ！四国総合型クラブの話！輪！和！」というテーマを掲げ、とにかく「楽しかったあ！」と言ってもらえるように、連絡協議会の役員で話し合いを重ねました。

当日は、創設支援クラブ・活動支援クラブ・県総合型クラブ連絡協議会加入クラブ代表者をはじめ、総勢92名の参加があり、様々な地域のいろいろな方々との出会いに恵まれ、また連絡協議会の役員の団結も深まり、とても有意義な機会であったと思います。以下簡単に概略を報告します。



(開会挨拶 野崎氏)

(SC全国ネットワーク常任幹事・香川県総合型クラブ連絡協議会会長 野崎武司)



(役員による手作り看板)



(会場に展示された香川県総合型クラブのパネル)

プレ・イベント

今回、「クラブ経営の課題を語り合おう」「“家族・高齢者向け”プログラムの一提案」という2つのプレ・イベントを開催しました。

「クラブ経営の課題を語り合おう」では、各クラブの代表に集ってもらい、抱える問題を共有し、課題を整理することを目指しました。「運営する側に地域の役に立つのだという気迫が必要」といった力強い意見、「行政はもっと地域のグラスルーツの活動を踏まえて普及にかかるべき」といった手厳しい意見まで様々な声が上がりました。「育成にあたっては、施設利用の優先権など長期的な視野で総合型を支援してほしい」「マネジャー資格を取得しやすくしてほしい」「総合型の知名度をあげよう」などの意見がありました。



「“家族・高齢者向け”プログラムの一提案」では、香川高専の木内隆文氏のご協力を得て、家庭用ゲーム機等を用いて、実際に体験しながら、クラブ向けプログラムの紹介を行っていただきました。分かりやすい資料など工夫していただき、本当に楽しい内容が満載でした。

(野崎武司)



ミニレクチャー

テーマ: 四国ブロッククラブミーティングのこれまでとこれから

- ・クラブの着実な発展を祈念して 長積仁氏(四国ブロック地方企画班長)
- ・全国のクラブの動向と四国ブロックへの提言 山中裕文氏(クラブリンク JAPAN)

長積仁氏、山中裕文氏に、これまでの総合型クラブ育成の経緯と課題をデータに基づいて整理していただき、先進地域の様々な活動(クラブがクラブを育てる時代など)を紹介いただきました。

(野崎武司)



パネルディスカッション

テーマ: 四国のおもしろクラブ、集まれ!

パネリスト: 徳島県 神田真奈美氏(NICE) / 北條種一氏(徳島県体協クラブ育成アドバイザー)

香川県 太田盛廣氏(香南ししまるクラブ) / 大山晶子氏(香川県体協クラブ育成アドバイザー)

愛媛県 山中政幸氏(おおずスポーツクラブ) / 作田拓氏(愛媛県体協クラブ育成アドバイザー)

高知県 田辺早由実氏(スポーツクラブスクラム) / 小松弘幸氏(高知県体協クラブ育成アドバイザー)

助言者: 長積仁氏(地方企画班長) / 能田雅雄氏(地方企画班員) / 前田義朗氏(地方企画班員)

コーディネーター: 齋藤栄嗣氏(地方企画班員)

まず、クラブ育成アドバイザーに各県の総合型クラブ育成状況を紹介していただき、その後、各県を代表するおもしろクラブに事例発表を行っていただきました。各県とも熱のこもった発表でディスカッションをする時間がほとんどありませんでしたが、各クラブの代表がこのような場で自分のクラブについて発表することは、クラブ育成という面でも大変意義のあることを確認することができ、今後も続けていくことが大切であると思いました。

(齋藤栄嗣)



(神田氏)



(太田氏)



(山中氏)



(田辺氏)

分科会1「新しい輪が生涯スポーツの環境を作る」

講演者: 白枝淳一氏 (NPO 法人出雲スポーツ振興 21)

助言者: 山中裕文氏 (クラブリンク JAPAN)

コーディネーター: 齋藤栄嗣氏

予算規模が4億6500万円の出雲スポーツ振興21の自主事業を抜粋して、スポーツと多様な分野との連携例(実際にやっていること<古代出雲発見ミステリーウオーク><神話の郷出雲四方綱引き全国大会><神在月出雲ちびっ子駅伝><あったかスクラム事業><家族でエンジョイキャッチボール><ヘルスツーリズム>)を報告していただき、歴史・発信・経済・福祉・子育て・健康的観光という面で地域社会への貢献を述べていただきました。

テーマである生涯スポーツは、「人が生涯にわたってスポーツと関わる中で必ず地域社会の多様な分野と繋がりが生れてくる」「クラブの活動を通して地域社会との連携が生まれ、地域の活性化・元気な地域づくりに繋がる」「新しい輪が生涯スポーツの環境を作るだけでなく、クラブの活動が新しい輪を作り、スポーツ環境や地域づくりに貢献していく相互作用である」すなわち、総合型クラブの多種多様な活動やアイデアがクラブを育て、地域社会に貢献し、地域社会に支えられるという循環を起こすとともにクラブの大きな存在意義となることが話し合われ、確認されました。本当に意義ある分科会でした。

(齋藤栄嗣)



分科会2「新しい輪が競技スポーツの環境を作る」

テーマ: 新しい輪が競技スポーツの環境を作る

講演者: 前田真吾氏 (NPO 法人スポーツクラブエストレラ)

コーディネーター: 野崎武司氏

NPO 法人スポーツクラブエストレラは、兵庫県姫路市でサッカーを中心としながら総合的にスポーツ活動を展開し、予算規模は3千万円を超える(一度も助成金をうけていない)という大きなスポーツ NPO です。

「子どももスタッフも、ちゃんと人を育てることが大事」「それぞれの自分のいいところを出せる環境づくり」「こまめに人と関わり、いろんな人のよさから力をもらう」「まわりの団体に必要だと言われる団体になること」「チャンスは汚れた姿で現れることが多い。チャンスの種に気づく感性が大切」「まっすぐな人が多くて、関わる人たちも子どもたちもまっすぐになるような気がする」等、印象深い話をしていただき、参加者ともたくさん交流できました。

(野崎武司)



分科会3「平成22年度tofo助成金の現状と事務処理について」

講演者: 宮本忠氏 (日本体育協会生涯スポーツ課)

助言者: 前田義朗氏 (地方企画班員)

コーディネーター: 上原勝己氏 (さめき三木スポーツクラブ)

「・スポーツ振興くじの現状について ・平成22年度助成事業について ・実施要項の変更点について ・対象経費の変更点について ・審査の視点について」を視点にお話しいただきました。22年度からは、総合型地域スポーツクラブ自立支援事業を強調されていたように思えます。また、実施要項・対象経費について、21年度からの変更点が多岐にわたるため、また助成事業1年目のクラブがなかったように思われるのかと思います。もっとも重要な審査の視点で、過去の報告書類の例を挙げ説明いただきました。



その後、前田氏より、いのスポーツクラブの申請書類を資料とし、書類作成について指導していただきました。分科会終了後、講演者に直接質問をしているクラブが複数ありました。

(上原勝己)

分科会4「人と関わる腕を磨いて、もっとすてきなあなたに！」

講演者：谷益美氏 (Office123 ビジネスコーチ)

助言者：長積仁氏 (地方企画班長)

コーディネーター：奥谷義明氏 (むれスポーツクラブ)

まず講演者である谷益美氏から参加者一人一人が初顔合わせの人もあるということで、相互に自己紹介をしました。

知らない人とのコミュニケーションを図るにはどうすればよりスムーズに行えるかという問題提起では、伝える側の思いが聴く側にどれだけ正しく伝わるかが大切で、伝える側の能力が優れて高いのに聴き手側の理解力がそれほどでもない…(逆の場合もある)ということも多々考えられます。どんな聴き手(相手)であっても相手の立場、空気感を読み取る努力を重ね、相手にパワーを上げる聴き手になることが、「空気感の共有」というコミュニケーションで大切なことです。相手が満足しない要素として、よく使われる「普通」、「当たり前」、「あっさり」、「早く」等々の言葉はいかにも纏め側としては便利な言葉であるが、相手は納得していないことが多いということです。

またチームミーティングでは、黒板等を使って記録に残しておくことで、話がそれないで核心に向かって進みます。

相談にやってくる場合、相談側はアイデアを持っている場合が多く、聴く力を上げてどんな回答を待っているのか相手の話の中から観察して、探し出すことも必要となります。

最終的にコミュニケーションは「オーダーメイド」であるとお話いただきました。

相手によって対応が出来るようあくまでもケースバイケースで。聴き上手になれ～！



聴き上手になる7つのポイント

- ①アイコンタクト…相手の目の辺りを見ながらよく聴く
- ②うなづき…「あ行」と「は行」を活用、時には目を閉じる
- ③相づち…「なるほど」「はい！」「そうですか」「その通りですね～」など
- ④話を促す…「それで、それで」「もっと聴かせてください」など
- ⑤オウム返し…相手の言葉を繰り返す
- ⑥ペーシング…相手のしゃべるスピードや雰囲気合わせる。
- ⑦ポジション…相手が話しやすい位置、距離、姿勢で聴くよう心がける

(奥谷義明)

分科会5「ニュースポーツを体験しよう！」

講演者：辻貴雄氏 (香川県キンボール連盟)

助言者：能田雅雄氏 (地方企画班員)

コーディネーター：辻正彦氏 (香南ししまるスポーツクラブ)

ニュースポーツはなじみが無いものも多いが、新しく考案されただけに色々工夫されており、スポーツ初心者にとっては気軽に体験しやすいと言えます。とは言え、決して競技として見劣りするわけではなく、スポーツの楽しさを味わいながら、競技としても追求できるような奥深さがあります。また、それらを両立させているニュースポーツが、着実に普及を見せています。

スポーツクラブのプログラムの活性化のためにも、色々なニュースポーツを体験して、スポーツに苦手意識を持っている、何か新しいことにチャレンジしてみたい、スポーツ種目で県代表になってみたいなど、



様々な地域の方々の多様なニーズに応えられるスポーツクラブとなってほしいものです。

ミニテニスでは最初はミニサイズのビーチボールのような球の動きに戸惑ったものの、皆すぐに慣れて、変則的な動きを見せるボールでのラリーを楽しんでいました。

パドルテニスでは、硬式テニスのような速い球足のボールに変わり、同じコートでもボール・ラケットによって感覚が全く変わる事に参加者は驚いていたようでした。

セパタクロウのボールの硬さには皆びっくりしていたが、参加者全員その感触を味わいながら、キックにチャレンジしました。

最後のキンボールでは、初めはルールに戸惑っていたものの、すぐにゲームを楽しんでいました。用具については見たことがある参加者が多く、指導者の派遣が普及の鍵であるようです。

参加者は今回の体験をととても喜んでおり、この交流が四国ブロック内におけるスポーツクラブの種目の充実とニュースポーツの普及とに多少なりとも貢献できたことを確信しました。

(辻正彦)